

子どもの「自立」を促すことこそ保護者ができる最良のサポート

受験期の子どもに対して、食事管理や生活のリズムを整える健康面のサポート以外に、どんな支援が考えられるのでしょうか。大学の入試広報に長く携わり、高校生やその保護者を対象にした進学相談会の経験も豊富な女子栄養大学の染谷忠彦広報部長に、保護者はどんな意識を持って子どもに向き合えばいいのかを伺いました。

思春期の子育ては「進路支援」に尽きる

— 受験を控えた子どもへの接し方として、とくに意識しておくべきことはありますか。

染谷 10代後半の思春期を迎える子どもたちは、社会性も含めた基本的な生活習慣の確立という意味での子育てはほとんど終わっています。ですから受験時期にある子どもに対しては、子育ての最後の仕上げとして、「自立」を促すことに力を注ぐべきです。ここでいう「自立」とは、子どもが将来の目標とそれを実現するために進むべき道を、自分の力で決定し、そこに向かって飛び込んでいくことを意味します。子どもに目的意識を持たせ、進路をきちんと決定できるようにすること、この「進路支援」こそが思春期の子育てで最も重要なポイントなのです。

進路支援では、子どもの目的意識が大きな力を発揮します。目的意識のある子どもは、大学の勉強も卒業後の仕事も積極的に取り組むようになります。

私が所属する女子栄養大学では、多くの学生が管理栄養士や栄養士、養護教諭、栄養教諭など資格取得をめざしています。目標がはっきりしているので進んで勉強しますし、困難な課題が出て必ずやり遂げます。卒業後は資格を生かした就職を考えており、返還が必要な奨学金も積極的に利用しています。学生から「借金しても勉強して資格を取り、働いて返します」という言葉を聞き、驚きました。極限すれば、目的意識さえあれば保護者はただじっと見守っているだけでもいいのです。

— 目的意識がはっきりしていない子どもの場合は、どうすればいいのでしょうか。

染谷 本来なら、小さな子どものうちから目的意識を持たせる訓練が必要だったのですが、受験期が近づいても自分の将来の目標がはっきりしない場合は、好き嫌いを糸口にして進む方向を考えさせるようにすればいいでしょう。まずは趣味、教科などの好き嫌いを、子どもにきちんと洗い出させることです。はっきりした目標が定まらなくても、大まかな方向性を決めることができればいいでしょう。大学や短大へ進学するメリットは、本当に自分がやりたいことを見つける時間が4年間または2年間あるということです。それを探すための進学というのも、一つの目的といえます。

大学選びで大切なのは教育環境

— 具体的な大学選びの話になると、保護者も現在の大学のことを知らなくてはなりませんね。

染谷 その通りです。保護者の時代と現在では、大学をめぐる状況が大きく異なっています。たとえば、大学の設置形態にしても、国立大学はすでに存在せず、授業料その他を独自に決定できるような法人組織に生まれ変わっています。大学入試システムも、一般入試と推薦入試以外に、大学入試センター試験利用入試、AO入試、自己推薦入試など多様化・複雑化しています。教育内容にいたっては、学問の進歩により新しい領域がどんどん増加しているほか、伝統的な学問分野でさえ社会のニーズを反映した実践的な教育へと変化してきています。また、文部科学省が教育面での競争を促していることもあって、各大学とも時代に合った教育、特色のある教育に積極的に取り組んでいます。学部・学科の新設や改組も進み、大学の序列も昔とは違います。入試難易度、施設・設備、授業内容・方法、取得可能な資格、就職先などいろいろな面で、状況が変わっているのです。

— 現在の大学の姿を知るためには、どうすればいいのでしょうか。

染谷 今はインターネットが発達していますし、進学相談会やオープンキャンパスなどで大学側も積極的に情報発信を行うようになっていますから、これらをできるだけ利用するといいいでしょう。ただし、気をつけなければならないことは、進路を決定するのはあくまでも子ども自身だということです。入試制度や教育内容など大学のことを知れば知るほど、子どもの進路選択に口を挟みたくなくなってしまいます。しかし、進路選択で保護者が前面に出てくると、子どもは他人まかせになり、逆効果になります。あくまでも後方支援的なアドバイスに徹するべきでしょう。

— 志望校選択の段階で、親がアドバイスできることはあるのでしょうか。

染谷 多くの受験生は自分の学力レベルに応じて志望校を選びがちですが、偏差値の高い大学と、しっかり勉強できる大学は、同じではありません。大学選びで最も大切なのは、教育環境が整っているかどうかです。これはオープンキャンパスに

女子栄養大学／香川栄養学園広報部長兼理事長付部長(学園政策担当) 染谷忠彦(そめや ただひこ)

プロフィール

1965年東洋大学経済学部卒業。卒業後は大学運営に携わり、他大学に先駆けた入試改革・教学改革を推進。斬新な広報手法により大学案内高校生人気度調査では3年連続全国1位に選出。2003年4月から現職。2004年に誕生した公立大学法人第1号「国際教養大学」には計画段階から参加し、入試委員会委員として志願者役の実績を積み重ねている。全高進大学進学指導研究委員会委員、高等学校評議委員、日本私立短期大学協会広報委員会委員等を兼務し、進路指導勉強会やPTA総会、教育委員会などからの依頼による講演活動のほか、学校経営セミナーなど大学広報活動の指導的立場でも活躍。



参加してもなかなかわかりません。いちばんいいのは、大学には「断らず」、普通の日にその大学のキャンパスを訪れ、授業風景を廊下から眺めたり、図書館や学生ホールなどで学生の様子を観察することです。さまざまな人生経験をもつ保護者であれば、学生がちゃんと勉強できる環境にある大学かどうかすぐにわかるはず。最近の大学は生涯教育などで社会人にもキャンパスを開放していますし、見学は選ぶ側の権利でもありますから、ぜひ普段の大学を、ご自身の目で観察されることをお勧めします。

保護者の考えは必ず伝える

— 子どもが自分の意見を聞いてくれない、子どもと進路の話ができないという場合はどうすればいいのでしょうか。

染谷 進路選択に際しては、子どもとのコミュニケーションが最も大切ですが、それが難しい場合でも、保護者は自分の考えていることを必ず子どもに伝える努力をしてください。子どもにそっぽを向かれたら、独り言のようにしゃべればいいのです(笑)。面と向かって言えなければ、横を向いたままでも構いません。とにかく「私はこう思う」ということを、何らかの方法で伝えることです。子どもは親の言ったことを必ず覚えていて、そのときは聞いてくなくても、あとで必ず思い出します。保護者の方も思い当たる節があるはず。大きな声の独り言もりっぱなアドバイスなのです。

— 最近では、父親が子どもの大学選びや進路選択に関わる家庭も増えてきたようですね。

染谷 その傾向は確かにあります。無関心な父親よりはいいと思いますが、子どもの進路支援ということ考えた場合、父親にはもっと別の重要な役割があるはず。ほとんどの受験生は社会と接する機会や経験が少なく、社会の仕組みや成り立ちを理解していません。進路を考えようとしても、現実離れたものになるかもしれません。そのときこそ父親の出番です。自分がどんな会社にいるか、その会社は何をどうすることで儲けを得ているか、社会的な位置づけはどうなっているか、その会社で自分はどんな仕事をしているか、組織はどうなっているか、そこでの自分の役割は何か、報酬はいくらか、この会社や業界などの将来性はどうか…といったことを「具体的に」話してあげるのです。たとえ特定の会社のことであっても、子どもはその話を通して、企業や働くことに対して具体的なイメージを持てるようになるはず。母親は、子どもの生活を間近で見つめて来ていますから、性格などもよく理解した上で、これまでの生活とこれからのことを考えたアドバイスができます。父親は、「自分の生き様」を

語ることを通して、子育ての最後の段階にある進路支援で貢献できるのです。このような父親の姿勢は、子どもの目的意識の醸成にもきっとつながっていくはず。

大学入学前に誓約書を書かせよう

— 高校現場からは、経済的な事情で大学進学を躊躇しているケースもあると聞きます。

染谷 高校生がいる家庭の経済状況に関しては、大学側と高校側とで認識にギャップがあることは承知しています。やや好転したとは言われていても日本経済は低調であることに変わりはありません。その一方で、大学卒業者のニートやフリーターの数は増加しています。これは保護者の過保護が主な原因です。大学の学費を負担することが常識になってしまっている社会のあり方にも、一因があるのではないかと考えています。

先ほども触れたように、目的意識をもった学生は借金をしてでも大学で勉強しようとします。また、家庭が裕福なのに二部の大学に進学し、働きながら学ぶ道を積極的に選択する学生も出てきています。そこには保護者を当てにせず、自分の学費は自分で稼ぐという意識が見られます。つまり「自立」しているわけです。

私は今後、「学生が自分で稼いで大学へ行く」社会へと転換すべきだと思っています。もちろん学生がフルタイムで働くわけにはいきませんが、奨学金や教育ローンなどを利用して、社会人になってから返す方法をとればいいのです。

— 自分で稼いで大学へいくということは、現状ではなかなか難しいような気もしますが…。

染谷 少なくとも、大学を卒業したら一切面倒をみない。保護者の時代は、ほとんどそうだったのですから。そこで提案したいのは、大学入学前に子どもに「誓約書」を書かせることです。内容は、大学卒業までは学費と食費に関しては親に頼るが、卒業と同時に一切の経済的な援助を受けないといったようなことです。学費の半分とか、3分の1を自分で負担するという内容なら、さらにいいでしょう。これは大学に入学する時点で完全に「親離れ・子離れ」を意識するための儀式といえます。高校生のうちから子どもにそのことを宣言し、実際に誓約書を書かせ、できるだけその通り実行するようにすれば、子どもの「自立」を大きく促すことになります。

大学選びや進路選択は、子どもの人生を大きく左右するものです。だからこそ、そのことを通して子どもが大きく成長できるように、保護者は子どもの「自立」を助けるサポートに徹すべきなのです。もちろん、健康でなければ夢は実現できません。子どもの食生活への気づきも大切にしましょう。